

# 山口県文書館および尼崎市立地域研究史料館所蔵の 明治18年大阪水害写真について

—1885 (明治18) 年淀川大洪水の研究 その2—

植村 善博\*・木谷 幹一\*\*

## I はじめに

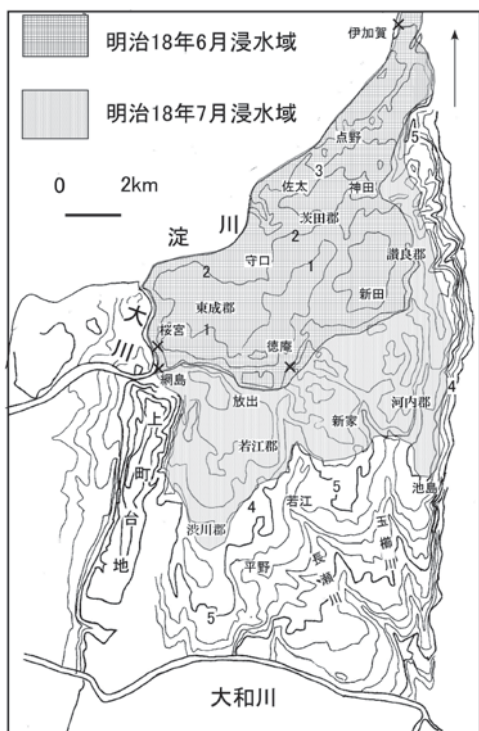
明治18年の淀川大洪水は歴史上最大規模のもので、享和2年の水害とともに大阪に甚大な被害を発生させたことで著名である(第1図)。明治18年大阪水害は明治前期の近代国家建設期に発生し、国や地方自治体による調査や緊急対応、復旧などが実施された初期のものであり<sup>1)</sup>、写真により水害の実態が記録された最初期のものである点でも注目される。本水害写真について北原(2006、2012)<sup>2-3)</sup>、明治前期の災害写真について金子(2005)<sup>4)</sup>の研究がある。最近、植村(2016)<sup>5)</sup>は本水害の概要および大阪歴史博物館の大原本および大阪府中之島図書館の府中本の2冊の写真帳、淀川資料館の資料および『淀川左岸水害豫防組合誌<sup>6)</sup>』掲載の水害写真について報告した。その結果、60点の写真の特徴を記載し、

重複分を除いて計38点の水害写真を認定した。今回、山口県文書館および尼崎市立地域研究史料館が所蔵する明治18年水害写真を検討した。その結果、新たな写真類が認められ、水害写真の特徴や製作過程について貴重な示唆が得られた。以下では、調査結果を速報的に報告しご批判をいただきたい。

## II 山口県文書館『小田家文書』と写真資料

### 1. 『小田家文書』の概要

小田家は江戸期に吉敷毛利家の陪臣で代々医者を務めた家柄である。萩藩領吉敷村に居を構え、明治期まで地元の医家として活躍した。この小田家から寄贈された『小田家文書』は近世から明治期の医学関係を中心とする図書や刊行物、文書資料など367点からなる。その中に写真資料62点が含まれ、これらが1枚ずつ整理アルバムに収められている(第2図)。写真の大部分は大阪とその周辺の名所や寺社などを写した記念写真である。このうち、明治18年大阪水害に関係するものが21点存在する。山口県文書館の分類によれば、諸家文書、小田家文書、標題は「明治18年大阪大水害ノ景」21点であり、請求番号は小田家134~154にあたる。



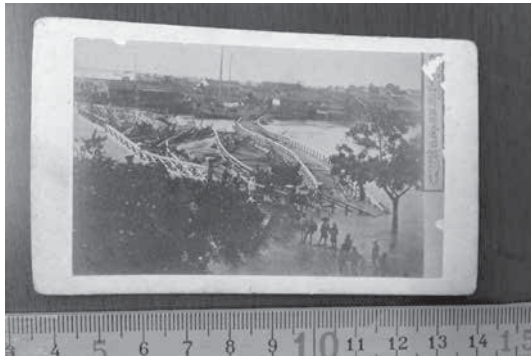
第1図 明治18年大洪水の東大阪の浸水域 (植村 2016)



第2図 小田家文書の写真整理アルバム

\* 佛光大学歴史学部歴史文化学科

\*\* 大阪市立豊里南小学校



第3図 小田家文書の台紙付水害写真 (G1)

## 2. 明治18年大阪水害の写真

小田家文書「明治18年大阪大水害ノ景」とされる写真資料は ①これまで淀川大水害の研究に利用されたことがなく、②枚数が21点とこれまでの最多であり、③全て厚紙の台紙に鶏卵紙写真を貼り付けた形式である、などの点で価値が高い。

### 1) 写真の特徴

請求番号小田家文書134~154の21点はすべて白色厚紙の台紙に印画紙を貼り付けた形式である(第3図)。台紙のサイズはヨコ約105mm、タテ65mmであり、印画紙は多少の不揃いがあるもののヨコ85mm、タテ50mm前後である。写真は小型でいわゆる名刺サイズに相当する。また、水害の状況とともに撮影年月日やタイトルなどを記した題紙が写しこまれている。これらの写真にG1か

らG21の番号を付し、題紙の記述内容などを整理して第1表に示した。表中の表記法は植村<sup>5)</sup>に従って、題紙のタイプをAとB、題紙のないものをCに分け、題紙が写真内に置かれているIと写真外にあるO、その位置が右側をRと左側をLとして区別したものである。G14とG15は同一写真でありながら台紙および題紙のタイプが異なっている。従って、内容的には20点とみなすことにする。また、他に同一写真がある場合その番号を示した。

### 2) 内容の検討

つぎに、表1に従って、写真の内容を検討してみよう。

- ①撮影時期：六月下旬が7点、七月上旬が12点あり、7月10日1点と記述なし1点および判読不能1点からなる。ほとんどが6月下旬と七月上旬に統一されている点が注目される。前者は第一、後者は第二の2回の水害に対応したもので、6月下旬は枚方堤防切口および網島大長寺裏切口のものが大部分を占める。七月上旬のものは大川に架かる橋の被害や河岸地の浸水状況、大阪城からみた浸水景観などが主な内容である。このうち、G6のみが月日を記す点が注目される。
- ②撮影内容：被写対象をみると、橋の流失4点、網島切口付近4点、大阪城からの眺望4点(第4図)、河岸地の浸水4点が多く、次いで枚方切所2点など

第1表 小田家文書の写真データ(同一写真の番号は植村<sup>5)</sup>による)

番号	請求番号	撮影年月日	タイトル	表記法	同一写真
G1	134	明治十八年七月□旬	安治川橋諸橋流滞図 北安治川裏手諸村落洪水遠景	BOR	R19・N7 (BOR)
G2	135	明治十八年□□□□	大阪城南秋山 摂津河内一覽	AOR	R3 (BOR)
G3	136	明治十八年七月上旬	大阪城南秋山摂津河内水害一覽	AOR	N20 (BOR)
G4	137	なし	大阪旧城鎮台ヨリ摂津河内水害一覽	AOL	なし
G5	138	明治十八年七月上旬	大阪洪水寄留地端建蔵橋水害	AOR	なし
G6	139	明治十八年七月十日	桜之宮切レ所ノ図 斤町裏ヲ遠景ニ見ル	BOR	R8 (BOR)
G7	140	明治十八年六月下旬	摂津網島大長寺裏堤防切所全図	AOL	N2 (BOR)
G8	141	明治十八年七月上旬	大阪東成郡網島大長寺裏切口	AOL	Y1 (AIL)
G9	142	明治十八年六月下旬	摂津東成郡網島大長寺裏 水吐為堤防悉ク切流ノ図	AOL	R6 (C)・N13 (BOR)
G10	143	明治十八年七月上旬	大阪東成郡網島大長寺裏切所	AOL	R5 (C)・N19 (BOR)
G11	144	明治十八年七月上旬	大阪天神橋水害	AOR	R11 (AIR)
G12	145	明治十八年七月上旬	大阪天満橋及京橋水害	AOR	N6 (AIR)
G13	146	明治十八年七月上旬	大阪堂嶋米市場水害	AOR	N10 (BOR)
G14	147	明治十八年七月上旬	大阪中之嶋階楽公園地水害図	AOR	N12 (AIR)
G15	148	明治十八年七月上旬	大阪中之嶋公園地水害	AIR	N12 (AIR)
G16	149	明治十八年七月上旬	大阪浪花橋水害ニ附船橋	AOL	R13 (BOR)
G17	150	明治十八年六月下旬	洪水摂津東成郡野江村水害	AOR	なし
G18	151	明治十八年六月下旬	摂津東成郡野田村水害ノ全景	AOL	R7 (BOR)
G19	152	明治十八年六月下旬	河内国枚方堤防切口	AOR	R2 (C)
G20	153	明治十八年六月下旬	河内国枚方堤防切口	AOR	N9 (BOR)
G21	154	明治十八年六月下旬	大阪砲兵支廠ヨリ摂津河内水害一覽	AOR	なし



第4図 大阪城から撮影した水害写真（上：G4、下：G21）

からなる。

- ③表記法：題紙は21点中Aタイプが19点と圧倒的に多い。G1とG6のみがBタイプであってかつ右側外に耳状に添付されている。両者はBORの写真複製したものである。配置をみると、G15のみがAを右内側に写しこんだARI型で、G14と同一写真だが題紙の記入法が異なっており別の題紙を用いている。その他はすべてO型であり、AORが11点、AOL7点、BOR2点からなる。これらO型の20点は写真の左右端部に題紙を重ねて焼き付けており、題紙幅分の画像が欠ける結果になっている。また、題紙の右おきが14点に対して左おきは7点となっている。

### Ⅲ 尼崎市立地域研究史料館 『石田太郎氏文書』と写真資料

#### 1. 石田太郎氏文書の概要

石田太郎氏文書は1995年阪神淡路大震災により被災した資料で、ご子息側から当館に寄贈されたものである。目録点数で171点、史料数303点からなる。石田太郎氏は明治24年国有化以前の山陽鉄道に技師として着任、その後鉄道院技師となった。大正7年シベリア出兵に際してウラジオストク港やシベリア、東支両鉄道を調査した後、仙台・神戸両鉄道局長を務めた。同退職後、神戸市電気局長や2代目山陽電鉄社長に就任している。同氏文書には明治後期～昭和前期の神戸の鉄道や都市計画関

係の資料が多数含まれる。

分類番号83-1-11が明治18年水害関係の写真である。なお、84-1-6に明治期の大阪造幣局関係の写真がある。

#### 2. 写真の特徴

分類番号83-1-11の11点はすべて鶏卵紙焼付印画紙本体からなる（第5図）。写真のサイズはヨコ135mm、タテ100mm前後とハーフキャビネのサイズにあたる。写真には撮影時とタイトルを記した題紙を写しこんだものの6点と題紙を欠く5点からなる。これらをA1～A11の番号を付し、第2表に整理して示した。

- ①撮影時期：A1～A5はすべて七月上旬で、A6には記載がない。A7～A11の撮影時は不明である。
- ②撮影内容：題紙を欠くものは、他の写真類から推定したタイトルを（ ）つきで示した。大川に架かる橋の被害4点、網島切口3点がまとまっているほかは、府庁、中之島公園、寄留地および野江村のもの各1点からなる。枚方に関する写真は全く含まれない。
- ③表記法：A1～A6は題紙を写真内に写しこんだAIタイプであり、右置き4点と左置き2点からなる。A1～A5はすべて七月上旬と記される。
- ④同一写真：大阪歴史博物館蔵大歴本（R）、大阪府立中之島図書館蔵府中本（N）、山口県文書館（G）の3史料と同じ写真であるものはその番号を示した。本資料のA3の難波橋仮船橋の写真はG16と同一物であるが唯一の新資料となる。



第5図 石田太郎氏文書の写真整理アルバム

第2表 石田太郎氏文書の写真データ

番号	整理番号	撮影年月日	タイトル	表記法	同一写真
A1	831	明治十八年七月上旬	大阪天満橋水害	AIR	R9・N3
A2	832	明治十八年七月上旬	大阪天満橋及京橋水害	AIR	R10・N6
A3	833	明治十八年七月上旬	大阪浪速橋水害ニ付船橋	AIL	R 13 に類似
A4	834	明治十八年七月上旬	大阪東成郡網島大長寺裏切口	AIL	G8
A5	835	明治十八年七月上旬	大阪中之島公園地水害	AIR	R15・N12
A6	836		大阪府庁	AIR	R18
A7	837		(安治川橋流出)	C	R20
A8	838		(寄留地水害)	C	G5
A9	839		(網島大長寺裏切口)	C	R5・N19
A10	8310		(網島大長寺裏切口吐水)	C	R6・N13
A11	8311		(東成郡野江村水害)	C	G17

#### IV 考察

以下では小田家写真および石田氏写真と略称する。

- 1) 小田家写真 (G) の 21 点と石田氏写真 (A) の 11 点合わせて 32 点の写真を検討し、第 1 表および第 2 表にデータを整理した。その結果、G4、G5、G7、G16 (A3) および G21 の 5 点は植村<sup>5)</sup>に含まれない新出の写真である。G16 (A3) は白い制服を着用した数人の軍人が写っている難波橋仮船橋 (第 6 図) で、R13 とは明らかに別写真である。また、G16 が BOL であるのに対し A3 は BIL と表記法は異なる。現時点で大阪水害写真として 43 点が確認された。また、小田家写真はすべて名刺サイズで厚紙に添付されており記念品として販売されたものであろう。石田氏写真はハーフキャビネサイズの印画紙本体であり 6 点は A、残り 5 点は C からなるが、その製作目的や題紙を欠く理由は不明である。
- 2) 小田家写真には大阪城から眺望した水害写真 5 点が含まれる。当時の大阪城は陸軍の重要施設であり、民間人の撮影が特別に許可されたのであろう。これらのうち 3 点は他の写真資料にはなく貴重である。



第6図 難波橋仮船橋の写真 (A3)



第7図 枚方伊加賀切所付近の写真 (上: G19、下: G20)

撮影時が六月下旬と七月上旬に統一されていることから、七月中旬以降に製作、販売されたものと推定される。一方、石田氏写真の A1~A5 は前者と同一であり、題紙はないが A6~A11 もこれに含まれる。水害写真の製作過程を考えると、①写真撮影、②鶏卵紙に現像・焼付、③長方形の題紙の作成と撮影、④写真と題紙を合わせて販売、⑤題紙を写真内に貼り付けて焼増し、⑥ついで新たな円弧状題紙を写真内に写し込んで作成、という順序が推定される。

- 3) 本水害発生の主要因は枚方伊加賀村における淀川堤防の決壊および再破堤であった。この切所付近の写真として山口県文書館の G19 および G20 の 2 枚がある (第 7 図)。両者とも 6 月下旬の撮影で、タイトルは枚方堤防切口となっている。また、同じ伊加賀付近の写真として R1 (第 8 図) と N8 があり、全部で 4 点存在する。これらの撮影地点を守口文庫蔵『牧方切所』(年代不詳)と中島 (2003)<sup>7)</sup>から編



第8図 枚方伊加賀切所の粗朶工事の写真 (R1)

集した復旧工事地図に示したのが第9図である。本図は6月下旬の約50間が切れた第1水害からの復旧工事の状況を描いたものである。第3表には伊加賀における決潰と復旧工事の経過概要を年表に示した。伊加賀の1次決潰で20数戸が流亡、下流の茨田、讃良、東成各郡の北河内低地が浸水した。切所の復旧工事は6月20日から開始され、切所の近辺には大阪府や内務省、警察などの出張所が多数設けられている。また、大阪監獄の囚人が土取りや運搬に動員され、その出張所は集落から隔離された意賀美神社の元境内地に置かれたらしい。しかし、残りあと20間で堰き止め完成という段階の7月2日に前回よりさらに大きく約150間が決潰してしまったので

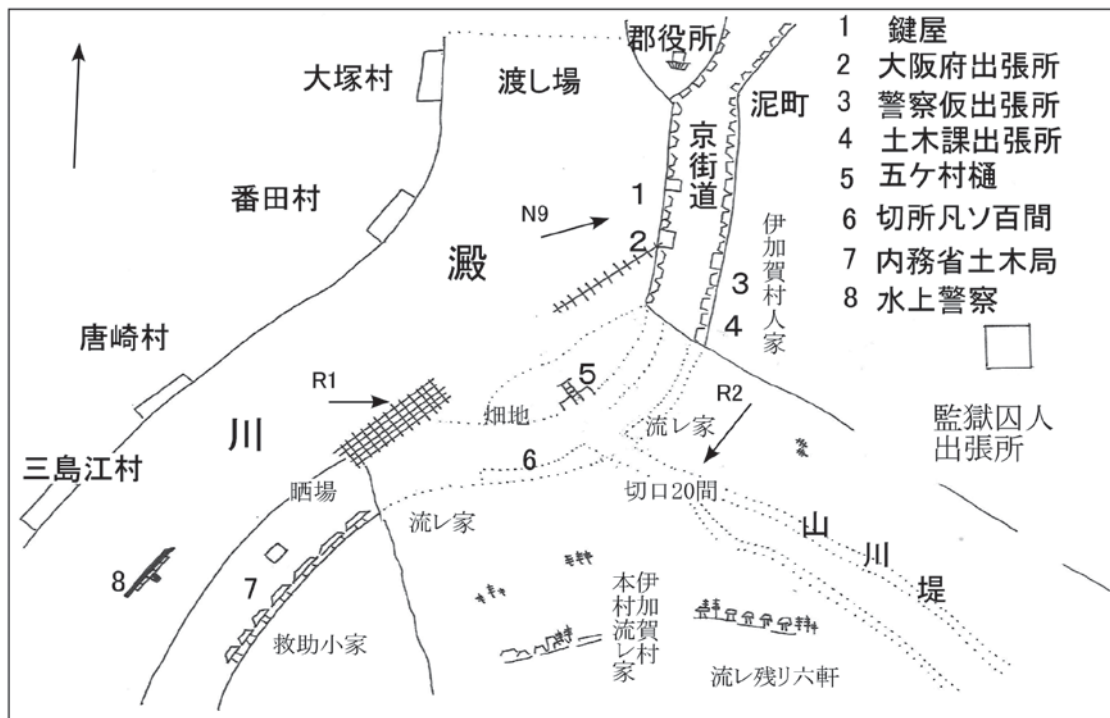
ある。

G19は山川堤防上に位置していた伊加賀集落の北端を東側から撮ったもの、G20は東海道に沿って並ぶ宿場と河岸を淀川の船上から撮ったもので、右端の林中に台鏡寺、中央に鍵屋の建物がみられる。また、R1は「牧方切所ノ図」のタイトルで、切所の下手（西南側）における堰き止め用の粗朶工事中のもので枚方丘陵が背景にみえる。撮影時の記載はないが、6月20日から開始された内務省による粗朶工と推定される貴重な写真である。

N8は「七月中旬牧方切レ口下手之図」のタイトルをもつが、この撮影位置は決定できない。結局、伊加賀切所の仮締切は約1カ月後の7月22日に完成した。さらに、約1年半後には切所に洪水記念碑が建立され、明治19年11月7日に知事や郡長、地元代表などが参列して記念式が挙行されている。これが数回の位置移動の後に枚方大橋南詰堤防上に置かれている『明治十八季洪水碑』である。

## V. まとめ

- 1) 山口県文書館蔵『小田家文書』および尼崎市立地域研究史料館蔵『石田太郎氏文書』に含まれる明治18年水害写真を検討した。前者に21点、後者に11点の水害写真がみとめられ、これらを第1表および



第9図 枚方伊加賀切所の復旧工事の状況 (守口文庫蔵「牧方切所」図などより編集)

第3表 枚方伊加賀切所の復旧工事の経過

年月日	時間	内容
6月17日	20:30	淀川の枚方水位が14尺に上昇
同日	23~23:30	伊加賀村の山川堤防より氾濫、京街道まで浸水、宇野晒場にて淀川堤防が約20間破堤、民家20数戸が流失
18日		府遠藤大書記が府土木課員、内務省土木局員らと枚方の防御に尽力
19日		伊加賀で淀川堤防切所が100間に拡大、堰止の方法を検討、資材を調達を開始
20日		破堤部上手は府が杭くい工、同下手は内務省が粗朶工に着手 淀川濁流により茨田郡一円、讃良・若江・渋川郡の数十カ村、東成郡北部が浸水
22日		切れ所で東西約40間の塞堰を出し、水勢の4割は本川に流れる
25日	13:20	工兵隊が飛び橋工事に着手、19:00に完成する 建野知事が属僚らと伊加賀に到着
27日		知事は伊加賀切所にて直接指揮する、東西から堰き止を進めるも残り約20間は未完成
28日		大蔵卿松方正義ら山崎駅より枚方へ渡って切所を視察、大阪鎮台の高島中將らも淀川を船により上ぼって巡視
30日		宮内卿より救助のため御下賜金3千円の沙汰
28~30日		降雨続き、29日より暴風雨、枚方水位12尺3寸に上昇、伊加賀切所塞がらず
29日	19:00	寝屋川と伊加賀からの流水が合わさって徳庵堤を破壊、寝屋川を越流して若江・河内・渋川三郡へ浸入
7月2日	0:30 8:00	枚方水位13尺4寸に上昇、2:00 三矢村安居と新町村森藪の淀川堤、新町の天野川堤が決壊 伊加賀の切所が60間破堤、再出水のため150間に拡大、寝屋川以南へ浸水し大湖水の如し
9日		三島土木局長が伊加賀切所を視察
10日		伊加賀の切所での築塞の工費は府が負担し、工事は土木局に委託する
13日	10:00	田辺義三郎技師が実測に従事
15日		田辺技師の計画により粗朶沈床工として堤防を設ける、約90間分の土材を御殿山から運ぶ
22日	19:00	伊加賀切所の東西から仮締切堤防が完成
8月29日		伊加賀切所の修復工事が完成、堤防長は219間7分、工事日数は45日
明治19年11月7日		伊加賀切所の洪水記念碑建碑式が建野知事・俣野郡長、地元の代表者らが参列して挙行、その後鍵屋にて300人参加の祝宴を張る

第2表にデータ化した。その結果、G4、G5、G7、G16 (A3)、G21 の5点が新たな写真であり、他の4資料をあわせると大阪水害写真は43点に達する。

2) 小田家写真は台紙に貼り付けた名刺サイズで、大阪近辺の名所など一連の写真を入手したものと推定される。石田氏写真はハーフキャビネサイズの鶏卵紙写真であり、大阪市内付近のみで枚方のものは含まれない。

3) 枚方伊加賀堤防の切所付近の写真はG19とG20の2点あり、他資料の2点と計4点存在する。これらと地図により伊加賀における復旧工事の状況を復原した。

### 謝辞

写真資料の調査および掲載に便宜と許可を与えられた山口県文書館、尼崎市立地域研究史料館および枚方宿鍵屋資料館に謝意を表します。また、議論してくださった吉田真夫、船越幹央、福田広宣、片山正彦の各氏に謝意を表します。

### 注

- 1) 大阪府 (1887) 『洪水志』大阪府蔵版、90 + 24p。
- 2) 北原糸子 (2012) 『メディア環境の近代化 災害写真を中心に』、お茶の水書房、116p。
- 3) 北原糸子 (2006) 『メディアとしての災害写真—明治中期の災害を中心に、『版画と写真—19世紀後半 出来事とイメージの創出—』、73~95 神奈川大学。
- 4) 金子隆一 (2005) 1880年代における日本の写真状況と磐梯山噴火写真、中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会報告書「1888 磐梯山噴火」、141~150。
- 5) 植村善博 (2016) 明治18年大阪水害の被害と記録写真—1885 (明治18) 年淀川大洪水の研究 その1—、歴史学部論集、6、1~10。
- 6) 淀川左岸水害予防組合編 (1929) 『淀川左岸水害予防組合誌』中編、442p。
- 7) 中島三佳 (2003) 『東海道枚方宿と淀川』、353p。